

京都大学	博士（文学）	氏名	福元健之
論文題目	ロシア領ポーランドにおける多民族社会の変容——地方医療の生成と分解（1899-1918年）——		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究の目的は、19・20世紀転換期から第一次世界大戦にかけてのロシア領ポーランドにおける多民族社会の変容過程を再構成することである。</p> <p>この時代の当該地域では、1905年革命を契機に既存の社会的・政治的な秩序が揺らぎ、民族問題に関する議論が超党派的に広がった。論争の一局面をなした社会主義者ローザ・ルクセンブルクによる論稿「民族問題と自治」（1908-1909年）が示しているのは、一方でネイションを単位とする政治運動が展開され、他方では統一されたネイションの存在を否定するテーゼが現れたほどに、当時あっては民族問題をめぐる見解には振れ幅があったということである。ところが、これまでの先行研究は、社会主義やナショナリズムに関心を集中させたがゆえに、この時代における変化をあまりに表層的に捉えてきた。ポスト冷戦期における最も重要な研究には、ブライアン・ポーターやスコット・ウリーらによる文献を挙げることができるが、そこではナショナリズムの排外主義化をめぐるコンテクストが克明に描かれる一方で、エスニシティごとに社会が分極化していくという単純な時代像が提示されるという点に問題があった。</p> <p>この問題を打開するための知見を提供するように思われたのが、カミル・シミエホフスキによる自由主義研究である。シミエホフスキは、ロシア領ポーランドの繊維産業都市ウッチのリベラル系新聞を体系的に考察して、当該地域における自由主義者に関して興味深い議論を展開している。シミエホフスキによれば、これまで断絶が強調されていたポジティブィストとその後継世代の知識人の一部には思想的連続性があった。新旧2つの世代からなる集団としての「進歩派」は、反セム主義的なポーランド・ナショナリズムを唱えた国民民主党とも、社会主義とも異なる言論を展開したのだった。</p> <p>シミエホフスキの議論にそって進歩派を定義すると、それは、1904年12月にアレクサンデル・シフィエントホフスキを党首として成立した進歩民主党を中心にしつつも、世代や党派を越える中道路線を志向した集団となる。進歩派は、革命による秩序の転覆には反対した一方で、資本主義が生む貧困問題に強い関心をもつ点で社会主義と親和的であった。進歩派の主たる政治的ライバルは国民民主党であり、進歩派は同党の「ポーランド人＝カトリック信徒」言説や反セム主義に反対し、異なるポーランド性の定義を模索した愛国的集団だったというのである。シミエホフスキは、進歩派最大の関心事が貧民の衛生状態の改善にあり、そこではとりわけ医師が重要な位置を占めたことは指摘している。しかし、新聞史料に基づいた思想史的研究という制約のために、彼には、医師の組織や活動に</p>			

関する踏み込んだ考察を行うことはできなかった。ポーターやウリーをはじめとする先行研究の課題を克服し、多民族社会の変容過程の再考につながる可能性があるにもかかわらず、これまで進歩派の研究は十分に取組みられてきたとはいえなかった。

上述のような研究状況を踏まえて、本研究は、ウッチの進歩派知識人であったユダヤ人医師セヴェーリン・ステルリングが編集長を務めた『医学雑誌』（1899-1908年）を中心に形成された地方医師集団に注目した。彼らはワルシャワやクラクフといった大学都市の外に広がる「地方」で医療に従事する医師だったが、ポーランド分割によってできた国境線を超えて活動を展開しており、衛生改革をめぐる議論を地方に普及させていった。本研究において、地方医療とは、こうしたステルリングを中心に形成された知識人による医療を指すものであり、それは、『医学雑誌』によって成立した後、ロシア領ポーランドを中心に展開され、第一次世界大戦期にポーランド国家のために動員される形で分解される。地方医療の生成から分解までを論じることで、先行研究を越えて、多民族社会の変容過程をより実態に即して再構成することができるだろうと考えられた。

また、対象としての地方医師を扱うことにも、次のような意義がある。これまで、ワルシャワやクラクフといった大学都市を中心に論じてきたホルスタッドやボウディレフらに対して、『医学雑誌』をはじめ、ステルリングらの論文や著作はウッチのローカルな医療という文脈に限定されて利用されてきた。しかし、『医学雑誌』は、ロシア領ポーランド各地の都市や農村で勤務する医師の活動について掲載しており、そこでの議論の射程は、決してウッチに限定されたものではなかった。そして、当時のウッチには、のちにワルシャワ大学総長や公衆衛生省大臣を務める医師が働いていた。戦間期ポーランドの医療の担い手が実践経験を積む場として機能していたウッチを中心に形成された議論は、ポーランド全体を捉えるうえで欠かすことはできない。なぜウッチという工業都市が、地方で医療の実践に従事した知識人の中心地となったのかを踏まえるならば、ワルシャワやクラクフといった「首都」的な都市の外から、当該地域における医療史上の個性を明らかにすることができると考えられる。また、地方医師にみいだせる進歩派としての活動とその限界を明らかにすることで、本研究は、自由主義の歴史研究にも貢献できるであろう。日本において東中欧における自由主義と福祉の問題を掘り下げて論じてきた姉川雄大らの研究からも明らかのように、自由主義をめぐる考察は、ナショナリズムの歴史と過去とも関連するものであり、極めてアクチュアルな問題をなしているのである。

以上のような問題意識にたち、本研究は、四つの章を設定し、後述するような三つの課題にこたえることを試みた。

第一章では、『医学雑誌』の分析をもとに、当該地域における地方医療の生成局面について論じた。ウッチ市が『医学雑誌』の出版地として地方医療の中心となったのは、ポーランド王国における経済発展と、そこにエゴイズムの脅威を看取した思想潮流とが交錯したためだった。編集者集団の出身大学に関する分析と合わせて考えるならば、ワルシャワの論壇において否定的に描かれたウッチに、ワルシャワ大学で学んだ知識人たちが社会改

革に駆り立てられたのである。同雑誌の編集長を務めたステルリングをはじめとする地方医師の間では、先述した進歩派が中心の座を占めており、彼らは「社会」という理念を掲げ、自分たちの現場に必要な改革を模索したのである。多様なエスニシティと階層から構成される「社会」の中で、とりわけ地方医師たちが問題視したのは都市労働者の衛生状態であり、この問題をめぐって彼らの議論は深められた。

このことは、1907-1912年にウッチ市で出版された『労働者衛生叢書』が成立する背景をなし、第二章では、同叢書を主たる史料として読み解いた。地方医師の語法では、身体的な健康と精神的「健全さ」とが密接に結びついており、女性には、彼女たちの経済状態が考慮されることなく、労働者世帯において衛生学的原則を実践する役割が要求された。その結果、医師と女性との間には不和が生じており、医師が熱心に改革を志向すればするほど、女性の負担が増してしまうというジェンダーの問題が、地方医療にはあった。また、地方医師たちは、ロシア帝政と抵触しない形での国家と「社会」の分業を構想しており、ドイツやスウェーデンの取りくみを参照したのだった。さらに、第二章には史料翻訳として、1914年にルブリンの医師たちがまとめた医療倫理綱領草案の試訳を付け足し、医師たちの間で共有されたであろう規範意識をより具体的に把握できるようにした。

ここまでの考察は、医師たちの学術的な議論に視野を集中させてきたが、続く二つの章では、こうした医師の知識人としての社会的な活動に焦点を広げる。第三章の目的は、地方医師を具体的な空間に位置づけて、彼らのいう「社会」の意味を政治的文脈の中で把握することである。この考察のために、地方医師の中心地としてのウッチ市における失業者対策運動は最も適した場を提供しており、ここで主に利用した史料は新聞だが、必要に応じて史料集に収められている政府や警察の文書も参照した。ウッチ市の失業者支援で確認されたのは、ナショナリズムの台頭に対抗するようにして、都市の多宗教性を維持しようとする市民の運動が生まれたということであり、医師はその中で重要な役割を担っていた。そこで描かれる「社会」は極端なナショナリズムとは緊張関係にあり、市民委員会が組織した公共事業ではユダヤ人住民も組み込まれた経済が構想された。しかし、そのような「社会」内部にも、序列化の要素は内在しており、「社会」を平板なものとしては捉えることなどできなかった。理念としての「社会」では、性と同様に言語をも諸主体の関係を規定したのである。「信仰、エスニシティ、政治的信条を超えて」活動をしていた市民委員会においても、ポーランド語は他の言語よりも優位に置かれていた。それゆえに、イディッシュ語を軸とするユダヤ・ナショナリズムへの反発が生まれる契機は、「社会」理念の内部に埋めこまれていたのだといえる。

そして、やがてこの「社会」理念は、戦争が続く中で一刻も早い秩序の再建が求められ、都市の自治や衛生学がポーランド国家のために動員される中で、行政制度にも反映された。第四章では、文書館に収められている手稿史料や各種の統計、新聞などを利用して、第一次世界大戦に伴った状況の変化に、地方医師たちがどのように対応したのかを論じた。同時期に初めて自治に関わるようになったステルリングらは、戦争という状況にお

いては、まずは秩序の再建を優先し、そのためにナショナルな政治に関与を深める。当時、都市評議会の選挙をめぐるのは、イディッシュ語に固執する行為が秩序の回復を阻む利己的な行動であるかのように捉える言説が影響力を増し、また 1917 年に開催された衛生学大会においては、新しいポーランド国家のための議論が積み重ねられた。ステルリングらはこの流れに沿って医療体制を構築したのであり、彼らが担った医療委員会は、不足する物資を効率的に配分する使命を全うするためという目的を掲げて、ユダヤ・ナショナリズムの立場に立つ医師には市立病院でのポストを与えず、また、ユダヤ人患者にはポーランド文化への同化を強制するような制度を設計したのである。もはや大戦前のような「首都」に対置されるような概念ではなくなった「地方」は都市・小都市・農村に分解され、ローカルな反セム主義への道を整えることになった。

さらに、本研究は、地方医師たちが活動する時代をより長期的な視野のもとで描くために、補論において、1905 年革命前の社会的・政治的状况を工場監督官というロシア帝国の官吏と労働者との関係に焦点を当てて考察した。ストライキや暴動を未然に防ぐ役割が求められた工場監督官は、劣悪な労働環境や職長とのトラブルの解決を求める訴願文を労働者から受けとっており、この制度は 1890 年代においては有効に機能していた。しかし、その後、20 世紀初頭における工場警察という新たなアクターの登場によって、社会主義者やナショナリストらによる労働者の政治的組織化が進展する余地が生まれてしまい、1905 年革命につながっていくことになったのである。

以上の議論からは、結論として以下のことを述べることができるだろう。まず、(一)「多民族社会の変容過程を捉えなおすこと」について。先行研究は、19・20 世紀転換期から第一次世界大戦にかけての多民族社会の変容過程を、一方向的な分極化として論じてきた。しかし、ナショナリズムの台頭という現象自体は否定できないものの、国民民主党と社会主義勢力との間で、あるいは国民民主党とユダヤ人による政治運動との間で激化する党派対立を解消しようとする運動が生まれたことは看過できるものではない。この運動は、ポーランド人とユダヤ人との反目に対応しようとした進歩派や、「信仰、エスニシテイ、政治的信条を超えて」失業者を支援した市民委員会によって牽引され、地方医師たちもその主たる担い手であった。彼らの説く「社会」理念は極端なナショナリズムとの間で緊張関係をもっており、性や言語の点において序列化の論理を備えていたが、この理念によれば、社会は、ポーランド人とユダヤ人との間で分断されているのではなく、ポーランド人およびポーランド語を話すユダヤ人とイディッシュ語を話すユダヤ人との間で分断されるのであった。このように、包摂と排除の対象や領域が再編されるものとして、当該時期における多民族社会の変容過程は捉えられるべきである。

また、これらと関連して、(二)「民族問題を社会問題と重なる領域において論じること」については、次のように主張できよう。ステルリングのようなポーランド愛国的なユダヤ人知識人にとっては、「社会」を宗教によってではなく、言語によって統一させることには、現地におけるユダヤ人の居場所を確保するためでもあったが、それには別の側面

もあった。つまり、イディッシュ語を重んじるユダヤ人の主張をより急進化させ、ポーランド人の態度を反セム主義に近づけてしまう、ということである。この意味で、ステルリングらによる戦略は決して成功したとはいえないし、大戦期においてポーランド国家連盟を支持したという点でも、彼らには政治的な限界があった。しかし、国民民主党よりはユダヤ人に配慮し、社会主義勢力と同じく労働者問題に関心をもっていたリベラルな地方医師らが、大戦期において医療制度の構築に携わったことの意義は大きい。制度的側面からみると、ナショナリズムや社会主義と同じように、進歩派もまた、先述のような限界を内包していた点も含めて、後の時代に引き継がれるものを多く遺したのである。

そして、(三)「ワルシャワやクラクフではなく、地方における医療からの時代像を提示すること」については、以下のように述べるができる。教育施設や人材、物資の足りない地方であるがゆえに、医師たちは漸進的に改革を進めるほかなかったのだが、こうした状況が、自分たちの現場に可能な改革を目指した地方医師たちの姿勢を規定したのであった。「国家」は、彼らの関心が収斂する主題の一つだったが、帝政期においては、ロシア帝国における国家と「社会」との分業を構想していたのに対して、第一次世界大戦に突入してからはこの構想に変化がみられたのだ。早期の秩序の回復を目指した地方医師たちは、ロシアからドイツへと支配者が変わったことを容認し、ドイツのもとでポーランド国家を設立し、住民の健康・衛生問題に対処しようとしたのである。このようにみると、医師らが政治的な行動の中でもポーランド国家を支持した背景には、大戦による状況の変化が大きかったことが明らかになる。国民運動の発展的な成果として国家が生まれたというよりも、戦争に苦しむ住民と、戦争を継続したいという帝国との依存関係のなかで、ポーランドの独立国家としての道は拓けたのである。

以上を総合すると、本研究は、地方医師たちに焦点を当てることで、彼らがポーランド語を共有する多宗教的な「社会」を構想し、それに基づいて実際の制度も構築されたことを明らかにした。このことから、自由主義の立場から取りくまれた衛生改革には性および言語という観点から制約があり、このことが戦間期ポーランドの社会と制度をも規定したのであることが示されている。こうした視点に立って戦間期以降の社会的変化を考察してみることが、本研究からえられる展望である。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ロシア人、ドイツ人、ポーランド人、ユダヤ人などからなる多民族社会ロシア領ポーランドが、世紀転換期に社会主義イデオロギーとナショナリズムによって厳しく分極化していく過程を、新興繊維業都市ウッチを中心にして、地方医師の思想と実践という切り口から、根本的に描きなおした意欲的な研究成果である。

従来の研究は、長らく政権イデオロギーを反映した解釈を与えてきたが、1990年代以降、イデオロギー性を超克する斬新な業績が相次いだ。こうした先行研究を辿り、筆者は重大な盲点を見出す。これまでの研究が思想・言説・表象に集中しているため、多民族社会の変容過程を分極・対立の側から一方的に描き、実態の解明が後景に引いているというのである。筆者は、社会主義ともナショナリズムとも距離を置く自由主義の潮流、とくにその主要な構成員であった地方医師に注目する。研究史上初めて、彼らの活動実践の生成から分解までを具体的に明らかにしながら、分極・対立とは異なる融和・包摂のベクトルを有する動きを構成要素に加えた「多民族社会の変容過程」の歴史像の構築を目指すのである。

地方医療の生成に着目した第一章では、『医学雑誌』を主たる史料として、地方医師の肖像を、彼らが置かれた具体的なコンテクストの中で描出する。状況の全く異なる農村と都市という現場での経験から「現場主義リアリズム」を培い、地方医師たちが包摂的な「社会」の理念を奉じてゆくさまが説得的に論証される。第二章は、かかる「社会」の理念で結び合わされた地方医師の目指した医療の方向性を、彼らの衛生改革論に即して明らかにする。『労働者衛生叢書』と雑誌『衛生』を精緻に読解し、地方医師たちが労働者の過度な飲酒を問題視した理由、結核対策についてドイツの先例が選好された脈絡、また乳幼児死亡率を下げる方法を巡り母親を重視する一方で女性の別の現実が無視される論理を通して、地方医師独特の思考法が鋭く剔抉される。

地方の医療倫理を如実に示すルブリン医師協会作成「医療倫理綱領草案」の翻訳を挿み、第三章は医療理念よりも社会的実践に焦点を合わせる。新聞などの資料を駆使し、1905年革命以降の分断が進行し世情騒然たるウッチにて、地方医師を重要な構成員にする「市民委員会」が相次ぐドゥーマ選挙の動向に即応しながら、エスニシティや宗教の違いを問わない失業者支援を展開し、やがてチャリティにとどまらず労使調停の役割を果たしたことが政治史的厳密さで再構成される。また、このとき医師たちが、多宗教的な秩序を維持すべくユダヤ人を含むポーランド語話者というまとまりを強調した点を指摘し、かつ、その包摂的意図が期せずしてイディッシュ語話者のユダヤ人を排除することに結びついたという、歴史の皮肉を示しているのは重要である。

労働者にとってのカトリック文化の重要性を確認する補節に続く第四章は、第一次世界大戦期に地方医療が分解するプロセスを重厚に描く。ウッチの市民委員会は、ドイツによる占領後は一種の自治機関となるが1916年7月には解体される。代わりに都市評議会が選出されることになるが、選挙に先立つ11月に独逸によってポーランド国家独立が宣言される。筆者はこの選挙戦での地方医師らの動向を追跡し、また、衛生学

大会での議論や自治機関内での都市医療の組織化の営為をたどり、かつて現場に根差して考え行動した地方医師たちが、新しいポーランド国家の秩序を優先し「社会」をポーランド性によって統合しようとしたことを明らかにする。

補論は、上記の完結した歴史の前史にあたる。ウッチの「工場社会」の不满を解消し秩序を維持する上で「機能」していた制度が、ペテルブルク由来の改革のために機能不全を引き起こしたことで、諸党派による労働者の動員が可能になった顛末を描く。本論での自由主義者の活動を理解するための歴史的前提が確認できる。

以上の通り、本論文は、個々には非力な地方医師たちが、『医学雑誌』などのネットワークを駆使してローカルを越えて結びついてトランスナショナルな知を共有し〔生成〕、以て現場のリアリティに根差した社会改良を志向するようになったが〔理念〕、革命、失業、ストライキ、第一次大戦、占領などによる行政の機能不全に対応する中で〔実践〕、ポーランド・ネイション（ポーランド語話者）のための、やがて上からの画一的な改良（さらにナショナリズム）を志向するに至った経緯〔解体〕を、自由主義という導きの糸でつなぎ合わせて提示することに成功している。

本論文の価値は次のようにまとめることができる。第一に、これまで看過されてきた地方医師の、医療という一見非政治的な社会的営為を通じた政治的なはたらきを説明したこと。第二に、研究史上二義的・消極的だと目されてきた自由主義に、実質的・積極的な歴史形成力を見出したこと。そして第三に、世紀転換期のポーランド史を理解する上で、地方の医師たちと影の薄い自由主義を、中央の政治家・党派・社会主義・ナショナリズムと並ぶ不可欠の要素として位置付けたこと。その結果、本論文は、世紀転換期ポーランド史の経路をこれまで以上に重層的に描くことに成功した。

とりわけ興味深いのは、地方医師と彼らが主要な担い手となった自由主義の潮流が、19世紀には殆ど姿を見せず、早くも第一次大戦の期間中に地方性を失い、ナショナリズムに回収されて解体している点である。19世紀から展望しても、第一次大戦以後から振り返っても、地方医師と自由主義は可視化し難いのである。それゆえ、筆者がこれら亡霊の如き存在に着目した慧眼と、史料に基づいて具体的な姿形を取り戻した労力とは、筆者の歴史学者としてのすぐれた資質を証明するものである。

もっとも、地方医師の実践や社会観の特殊性、地方医師が自由主義と親和的であり得た理由、「社会」の側の地方医師観、地方医療の構造といった点について今少し論じ深める余地はあるだろうし、史料の読解においてさらなる熟考を要する箇所もみられるが、いずれも今後の研究によって回答と改善がなされるものと期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2019年1月18日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

